

内山尚三先生を追憶して

半田 祐司

内山尚三先生が御他界されて、すでに一年が経とうとしている。時の移ろいの早さは、馬齢を重ねて残りの時間が総計的に少なくなってきた年代からなのかとも思うのであるが、とにかく瞬く間に過ぎ去っている。四谷の千日谷会堂でお別れしたのが、まるで昨日のような気がしているからである。

先生にお会いしたのは、札幌大学に創設される法学部の学部長予定者になられて間もなくの頃であった。当時の学部設置認可に至る過程は、現在のような設置認可方式とは異なっており多くの制約が課されていたので、文部省（現・文科省）・大学設置審議会の設置要件をクリアするためには相当な苦勞を甘受しなければならぬ状況にあった。その気骨の折れる折衝の中核は、学部設置の基本的コンセプト・設置趣旨を初めとする多くの設置要件をクリアするためのものであった。当時法人理事を務められていた堺鉦二郎教授（現・作新学院大学教授）や田中昇平教授（本学経済学部教授）がその衝に当たられたが、それには、計り知れない心勞があつたことであろうと想像される。そして、この対応と平行して学部スタッフの要である法学部長の人材を得なければならぬのであつたが、先の

両先生は、いわば三顧の礼を尽くして、内山先生に就任を懇願したと伺っている。法学部設立の熱意に打たれた先生は、莞爾として申し出を受けられ、法政大学の定年をまだ三年残しておられるにもかかわらず、法学部長として札幌大学に赴任されることを了解されたのであった、と聞いている。

内山先生に拝眉の機会を得ることが出来たのは、ちょうどその前後であったようである。失礼ながら、専門分野が異なっていることもあって、学界や建設業界でご高名な先生であられたことや、平和七人委員会の事務局長をお若いときからお務めであったことなどは存じ上げなかった。お会いするごとに、そのご活躍ぶりをお人柄の滲み出る話し方で控えめに開陳されるのを伺っていて、漸くにして、多くの業績を積まれた方であることを知った次第である。

目出度く文部省から法学部認可の報を得て、平成元年四月に札幌大学法学部は出発した。私法分野では学部長の内山先生、公法分野では憲法学の小林孝輔教授を中心として、比較法の五十嵐清教授、行政法の近藤昭三教授という錚々たる陣容での船出であった。

初年度赴任のスタッフが意気に燃えて第一回の教授会に勢揃いしたとき、内山先生は開催時刻についてユーモラスな理由を付けられて、三時からの開催を提案された。「三時であれば、教授会が終わった頃には日が暮れるから、それからゆつくりとみなさんでお酒が飲めるでしょう」ということであった。左利きの多かったスタッフには異存がなく、これが定時になった。しかし、お酒の好きなお方であっても深更に及ぶということは全くなく、九時になると「それではご機嫌よう」といわれてお帰りになるのが常であった。

法学部長を二年務められた平成三年初頭に、内山先生は、突如、学長に選ばれた。平和七人委員会や建設調査会

のお仕事も続けられておられたので、御内心では、法学部の完成年度を迎えるときまで学部長として務め、その後は東京に戻られる予定をしておられたようである。しかし、学長となれば、常時大学での執務があるから、章子奥様も札幌に移られて先生をサポートされる事態を余儀なくされてしまった。「予定が狂った」としばしば嘆いておられたのも、恐らく、いろんな波紋がご自身を越えたところに波及していたからであろう。

在任中は、教養部の解体や大学の高度化を目指した大学院創設を軌道に乗せるというエネルギーのいる仕事に専心されておられたが、その当時の御奮闘振りは今も鮮やかに蘇ってくる。その後、大学院法学研究科を初めとして全学部の研究科が設置されるに至っているが、これは内山先生が先鞭を付けられたものである事を忘れるわけにはいかない。またこの間に、恩師の川島武宜先生の蔵書を法学部の開設間もない本学に寄贈していただくために骨を折られて、札幌大学図書館に川島文庫が設けられたことも特記される。

学長を退かれて本学を去られた後も、内山先生は常に札幌大学のことを気にかけてられ、我々のところに「その後どうですか」と電話を戴くようなことが一再ならずあった。入学式や卒業式の折りには、わざわざ長駆東京から参列して下さるほどの熱意をお持ちであった。

千日谷会堂に掲額された御遺影を拝見しながら、あのゆつたりと語り出されるにこやかなお顔にはもう相見えることが出来ないのかと思いつつ香華を手向けた日が、間もなくやってくる。内山先生のご尽力の賜である札幌大学法学部の一員として、微力を尽くしていくことをお誓いして筆を擱くことにする。

（平成15年11月記）